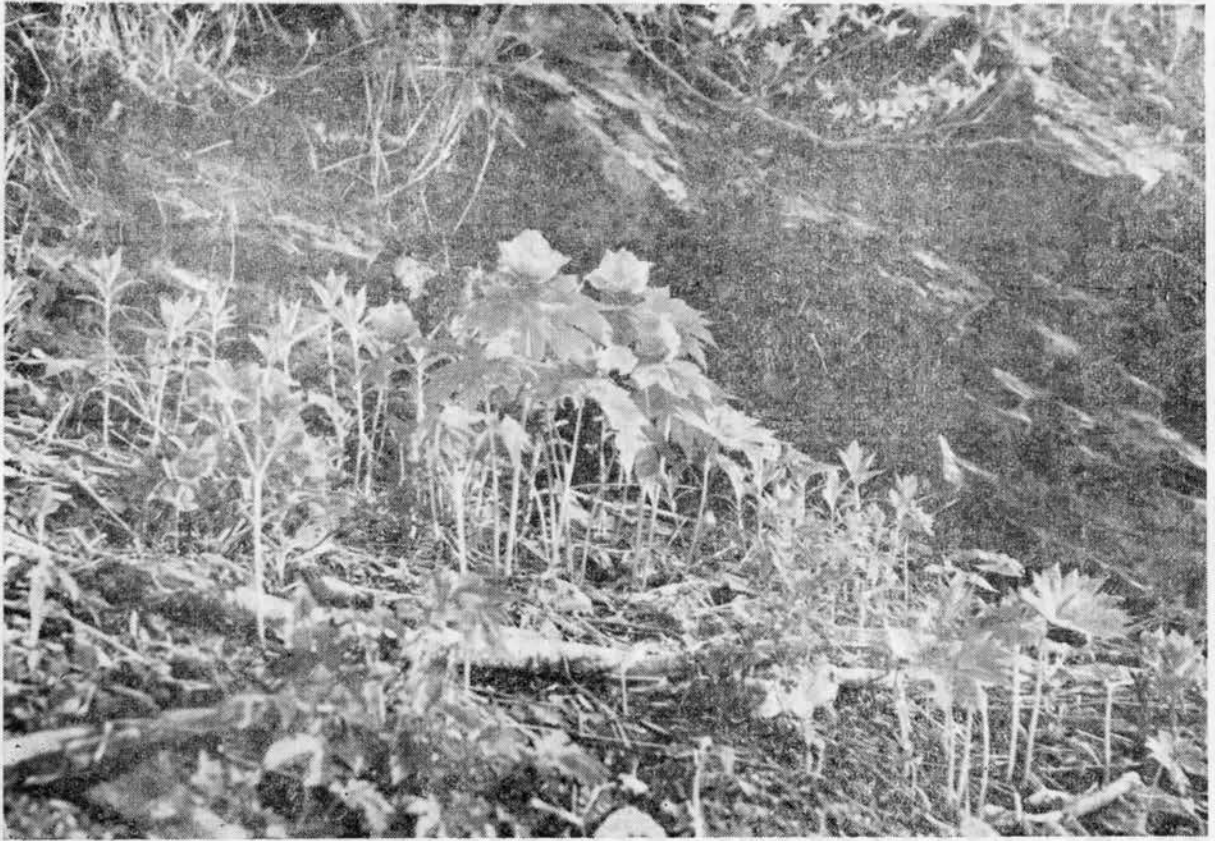


山と博物館

第10巻 第6号 1965年6月25日

大町山岳博物館



登山者のモラル

山の遭難はいっこうに減らない。年末年始春夏山シーズンが近づくと、警察とマスコミがいっせいに警告を発する。警告はここ五、六年の年中行事にさえなった感がある。しかしこの警告を、はたして何人が心に受けとめるだろうか。遭難がふえたといっても、何千人か入山したうちで、死ぬのは十人そこそこ。大部分の登山者は、山を駆けめぐって元気に下山している。大町警察署へ下山届けに来たある若者は、「軽装はいけないといわれていたが、われわれは無事登頂してきた」と自慢げに話したとか。こんな例はいっぱいあり、山に来る若者たちは「自分は山で死ぬはずがない」と思い込んでいる。こんな人たちには、警告は、警察やマスコミの「お経」としか受取られないだろう。どんなに多く注意報を出しても、それに耳を貸さない若者が日本中にはわんさどいる。それが証拠には、山で遭難を起こしたパーティーの態度が何と悪いことか。救助隊や警察に礼をいわないのは序の口。おれたちは山小屋に避難していたのに、下でかかって遭難だとさわいだ、迷惑だといった大学パーティーもあった。

それでも救助隊員や警察官は、遭難ゼロを目指して、今夏も後立山のパトロールに入る私が大町に来て一番嬉しかったのは、大町の山関係の人がみんな善人だったことだ。山内の人、山小屋経営者、警察官、山博の方々それぞれに山を愛し、人を憎まない。それにしても、みんなの努力が報われる日が、いつ来るのだろうか。

大町を訪ねて

私の思うこと

日本山岳会長 松方三郎

対山館のこと

大町というところは、日本の山でいえば、非常に大事な拠点だと私は思うのですが、今でこそ乗物にのつて、どん／＼山奥へいつてしましますから、大町は通過駅みたいなかたちになつてしまつていて、近頃の人は大町は日本の山登りの歴史の上でどういう役割りを果たしたかという事を余り頭においてないと思います。他所から来る人達は勿論そうでありませんが、大町の土地においてもそういう感じが、むしろ薄らいでおるようなことではある

まいかと心配するのでありますが、大町は永い間日本の登山の一つのセンターとして、非常に大きな役割りをしたわけでありまして、

私なんかも大町へはじめて来たのは、ほぼ五〇年前であります。その時分です。松本からすぐ乗り換えて来るなんて芸当は出来ないで、松本（松本の北駅と云つてたんだそうですが）で降りて、松本の街を歩いて大町までトコ／＼やつてきたのであります。そして大町で、今でも建物は残つておりますが、当時の対山館（その当時山へ行くにはネコもシャクシも対山館にとび込んで、ここでやっかいになつたのであります）その対山館にころがり込んで、先年亡くなられた百瀬慎太郎さんの処にやっかいになつて、山の相談だろうが、山案内の世話だろうが、いろんな持って行く物の買い込み等、全部百瀬さんの世話になつて出て行ったものであります。

今でもそうだと思うんですが、対山館に入つてみますと、入った処が大きな部屋になつておりますが、二階の欄干から下が見下せるようになっていて、東京から誰か来たとか、案内の誰と誰と出て行ったとかいふようなことが、ここで油をうっているようにとる。我々にとっては非常になつかしい。これが出発点でありました。なにか最近是对山館が中の模様がえて建物がかわるという事を聞いて我々非常に惜しいような感じを持つのであります。これは大町の問題で我々がそこまで口をさしはさむすじ合ひであるかどうか、こ

れは別問題として、とにかくそういう何十年かにわたつて、日本の北アルプスに登つた沢山の人がこの対山館のやっかいになつた処であります。今はそういうものとして、北アルプスはおろか日本中の残つてゐる、数少ない建築物だと私は思うのであります。そういう点でまだ建物は残つてゐるようでありまして、あの建物が日本の山登りの歴史の上で、大きな役割りを演じた建物であるという事を皆さんの頭の中に憶えておいて頂きたいと思ひます。

対山館で案内を頼むとか、ワラジを買ひ込むとかしますと、大町を振り出しにここから歩き出して針ノ木へ出て、丁度針ノ木の雪溪の下にその当時はいい加減なものでしたが、テントを張つて寝て、針ノ木を越して向側に一晩寝て、平の渡しを渡つてこんどは五色ヶ原へ行つて一晩、それから室堂で一晩、そういう風にして立山から剣へ行き、剣から黒部を下つて、黒部川を渡つて今度はこちら側へ来て、祖母谷の温泉へ来て露天風呂に入つて五竜岳の上つて、五龍から白馬まで縦走して白馬から四ツ谷へ下るといふ、かれこれ十日間の日程でありました。今はおそろくもつと早く行けるんだと思いますが、私はその前に一つべん中房へ入つてゐるので北アルプスに入つた二度目の山登りであつたのです。

それ以来何んとかかんと云つて続けて、今日に至つてゐる訳です。その内日本の国内で歩いた山といへば、結局信州がやはり一番多いのではないかと思ひます。その振り出しが大町だと云う訳です。ですから私の生涯にとつては非常に大きい因縁のある町になるわけでありまして。

各地の山岳博物館

大町にはもう一つ山の方から云うと、問題として大いに取り上げるべき施設があるのには御承知のように山岳博物館であります。こ

れも今世界中には方々の国に行きますと、山岳博物館的なものはあります。山のセンターという処では大体そういうものを持つてゐるのですが、日本では極めて数が少ない。

松本ではいつべん造りましたけれども、市の財政が許さないとか何んとか云つて、たちまち物産館にかつてしまつて、又最近造るゝか云つてゐるようです。大町の山岳博物館はそういう意味で唯一の、統一している山岳博物館であり、いろ／＼乏しい財政の中から研究調査を今日なお続けておるわけでありまして。日本としても非常に大きい存在であるうと思ひます。

これはいろんな問題、困難は有るかと思ひますが、なんとかして切り抜けていつて欲しいと念願してゐるのであります。それについても大町のみならず、これは日本の宝なんだという気持で、大事にすることを祈つてやまないであります。

今年は一九六五年であります。丁度一〇〇年前の七月にウインバーがマッターホルンに登つたのであります。七月十四日だと思ひますが、一〇〇年目のお祭りをツェルマツトというウインバーが登つた町でやるわけです。それで、これを機会にみんなアルプスへ来いといつて、スイスは大変な宣伝をやつてゐます。

ツェルマツトへ行きますと、小さな山岳博物館というのがあつて、そこにはウインバーが最初に登つた時のいろんなものが残つております。ウインバーの「アルプス登はん記」という本が、岩波文庫に入つておりますが、あれを読むように、ウインバーはマッターホルンに最初に登つた時に、下りがけに遭難して同行者四人が死んでゐます。その時に使つた綱が途中で切れたという事が問題になつて、その後裁判になつて大きな話題になつたのであります。その綱がかざつてあるとか、或いは「ドール（登山家）の靴がかざつてあるとか、いろ／＼な写真や、品物がかざつて



講演中の松方三郎氏

あつたりして、小さいながら非常に趣のある博物館であります。いわゆる一般的な山岳博物館というよりも、ツエルマットの山岳博物館といつて良いでしょう。そういう意味で小さいながら、特徴のある博物館であります。スイスには他にスイス全体というか、スイス山岳会の博物館がベルンにあり、これは非常に大きいもので、種々の歴史的なものと学問的な資料があつて、立派な近代的な博物館になつています。

ツエルマットのは極めて古風な、薄暗い小さな博物館ですが、ツエルマットへ行く人は必ず山の行き帰りにいつべんのぞいてみることになつています。更にツエルマットにはウインパーが登つた当時の宿屋であるモンテローゼというのが一〇〇年経つているのですが、いまだに残つていて、おそらく内部は改造してしまつたようですが、私が行つた時は六〇年以上経つています。モンテローゼのホテルの、町の方に向いた壁にウインパーのレリーフが丸くはめ込んでありました。私は丁度それが出来た時に行つたわけですが、なかなか大したお祭りでした。ウインパーが登つたという事を記念する意味で、何もその為にホテルを保存したというわけでもないでしょうが、回りに林立する他の立派な近代的なホテルの中に、そのモンテローゼだけは旧態依然たる古いホテルの姿を維持しているのです。途をへだてて向う側にベンチが並んでいて、山へ行く奴はみんなそこへ腰かけて、一日中とぐる巻いていて、山案内人どもの処へ行つていろいろ話をする。そこにいると、今日誰が何処へ行つたとか、何処でどんな遭難が有つたとか、モンテローゼの前の広場で手にとるように判るわけでありませう。

周りにツエルマットですから沢山の観光客が往き来して賑やかな所ですが、その一ヶ所だけが何か山登りをする連中の別天地のようになつていて、各国のいろいろな登山家たちが

ろしていてなかく風格のある場所になつていました。ツエルマットはそういう意味ではなかく面白い所で、谷の行き詰りではあるんですが、自動車や馬車に乗り入れさせないなど云つて、未だに頭張つているような話であります。馬車に鈴のついたのがチャラン、チャランやつて駅からホテルまでお客さんを運び、自動車が谷の下に止めてしまつて中に入れないといった風に或る意味では伝統というか、山の空気というものを大事にしてゐる所です。日本にもそんな所の一つや二つ有つても良いと思つたのですが、上高地の河童橋までバスが入つて来るというのが現状であります。黒四のダムにハイヒールの若い連中が押し寄せて行くわけですが、まあ黒四ダムは近代造形として良いとしても、上高地までこういう連中が入り込まなくても良いと思つたのですが、これは別の問題に移るのであつてとにかく日本ではそういう意味でみんなえらそうなる事をいうんだけれども、案外古いものを大事にしない。戦争に負けると大体この位はボケるかと思つたのですが、ボケついでに日本の国をメチャ／＼にしてしまへという事になるわけ、私は非常に残念だと思つたのであります。もつと日本の国をお互いに大事にしたらどうか、又古いものを古いからといつて大事にすることはないけれども、残すべきものはやはり残すとか、こういう事にもつと計画をもつてしたらどうかという気が、つくづくするのであります。

美しい日本の森林・渓谷

自然保護、自然擁護などの解りきつた事は非常に難しい事ですが、解りきつた事が解り切つた事として世の中をどうつておれば、いらないでいるにこした事はないんであつて、誰も人が聞かないのにそんな事を苦勞して話す必要はないのですが、自然保護など云いながら、日本は自然をメチャ／＼に

している国ではないかと思ひます。黒四ダムなどというものは確かに自然の形を変へることでありますから大問題なのですが、しかし時と場合によつては国の必要のもとに或る程度そういう施設を作るといふ事は、やむをえないという事で良く解るのであります。しかしそういうものが、無制限に、どこもかしこも日本中の河をダムにしてしまつていふようなことになつては、まことに惜しいと思つたので、黒部一本からいへばあの下黒部はもはや全然川でなくなつてしまつたようなものであります。そういうものとただ黙いていてもしょうがない事でありませう。

しかしながら日本の自然のかなり大事なもの、日本の川であるといふ事を考えれば、やはり黒部もその一つとしてなんとか大事にするといふ考え方は、お互いに持つて良いように思つたのであります。

外国なら他のいろいろのものを挙げられるでしょうけれども、日本の美しいもの、世界の中に出してなによりも美しいもの、一つは森林であり、溪流であるといふ事は上高地に像のあるウエストンさんが始終いついていた事でありませう。森林の点はウエストンさんが亡くなる時は、もうかなりあやしくなつていたのであります。上高地の河童橋界隈は、昔の水ナラの森林がド／＼なくなつてあつてその後針葉樹の植林が造られていたわけでありませう。営林的に考えれば、これは合理的でありませうけれども、上高地の風致といふものは少なくともそれによつてガラツと變つてしまつたわけでありませう。

しかし今は針葉樹が大分大きくなりましたので、一応昔のような裸の見苦しい状態ではなくになりましたが、日本の森林が他の国に比べて非常に美しいんだと、外国の連中がいつているのだといふ事を、我々良く頭におく必要があると思つたのであります。というのはヨーロッパのアルプスなんか歩いていまして、森林の美しさといふものに会う事がほ

とんどない。つまりアルプスといつて我々が普通行くグリーンデンワルドという村、或いはツエルマットというような所(拠点になるわけです)へ行きますと、森林限界といふのは雪線と、森林限界とが重なつていふわけで、日本なら良く解るのでありますが向うでいへば、森林限界といへばもつと低くて、それから先に草原地帯(アルプ)といふものがあるわけでありませう。

牛や羊なんかを放飼にするわけですが、いきなりアルプへいつてしまつたので、それから上はほとんど木なんか無くて、その上は氷河であつて岩山になつてしまつたのであります。つまり森林の中を歩くといふ楽しみは、ヨーロッパのアルプスにはほとんど無いと云つて良いでしょう。ですからヨーロッパから来ると、日本の森林といふものはいかにも良いと云う事になるのだらうと思ひます。

その次は川なんでありませう、これが又日本としては非常に特徴のあるものであり、我々からいへば当り前なんです、外国から見れば、川は非常にきれいだという事になるのであります。梓川ひとつとつてみても、あれだけ美しい流れ、澄んだ水というものは外国の川にはほとんど見られない。ドイツに入れば美人ときれいな川はないといわれる程、ドイツの川は濁つていませう。



カモシカと一緒に

水河の河というのは、みな水河が岩を削ってきますから、白く濁っています。南の方へ行ってインドやビルマの河へ行けば真黄色で、子供にクロロンを持たせて河の絵を画かせれば、みんな赤く塗ってしまうのです。河が赤いから仕様がないうで、水色に塗るのは日本の子供だけです。

そういう風に日本の川は清冽で、魚の泳いでいるのが上から見ると、日本独特のものだと思います。手を入れると切れるように冷たい、あゝいう川は他の国のどこにも有るという川ではなくて、日本の特徴をなした川といつても良いであります。

その川をかたばしからダムを造ったんでは日本の山や川の良さというものがかなりのものが無くなってしまふといえるでしょう。

ダムを造るとか造らないという事は、又別の角度から検討するに備する事でありますが造った結果が川をなくした事は事実であつて観光などといつてダムを造つて人を呼ぶのも一つであらうけれども、川を自然のままに残して、美しい自然の姿で人の心をひきつけ、人を呼ぶというのも又違った観光の方法だと思ふのであります。

そういう意味で、なか／＼この問題はむづかしいのですが、しかしただこれだけの事はいえると思ひます。巨大な土木工事をやつて川をせき止めて、そこに大きな発電所を造るというような事は、確かにこれは文明の一つの或る高さを示すものである。どこもかしこもこんなものではなくて、世界中にこんな事のできる国は、数える程しかないわけです。しかしながら、ダムはここまでで止める、つまり機械の入る処はここまでで止める、つまり決めて、その上は自然のまま残すという事は更に高い文明だといえると思ひます。

ヨーロッパでも、アメリカでも次のかなりの高さに来ていると思ひますが、日本はまだなにか／＼そこまではいっていないというのが実情だと思ひます。

自然の重要性

我々始終山にやっかいになり、山を愛している連中としては、日本の自然の為に大いに奮闘しなければならぬのですが、金も力も一党とたちうちするわけですから、難事には相違ないのです。しかしながら、今にそういう事が解つてくるだろうという事は間違いないのですが、ただ日本のような国では解つた時にはもう何もなくなつてしまふのではないかと心配は大いに有ります。

アメリカみたいな広い国でも、国立公園の運動とか、そういうものが出来たのは、結局アメリカの自然というものが根こそぎ無くなつてしまふという事で、こういう運動が生れて来てはは数十年の歴史を持っています。

アメリカの山岳会では有名なシエラクラブというサンフランシスコにある山岳会(この会を作つた最初の会長であるジョン・シユラーという有名なナチュラリスト(自然研究者)は、アラスカの探検をやつたり、ヨセミテの森林保護に奔走したりして、このような人達が国立公園運動をやり、それで政府を動かして、アメリカはあれだけの国立公園が出来たのです。アメリカの国立公園の起りは自然というものが全部なくなつてしまつては大変だといつて、一生けんめいにこの運動を展開して、或る程度成功したわけなのです。つまりアメリカはもう文明の次の段階にきていたといつて良いであります。

しかしながらまだ安心は出来ないといつてしまふ。現在内務長官といつていますが、実際に、国土長官ともいつた方が良いかもしれませんが(ミニストリアル・インピーリアルといつていますが)これが国立公園を管理するとか、資源保護に当るとかいろいろな事でもここに集中しているのです。この長官で前にも、日本に来た事のあるニールドという人が二年ばかり前に、「静かなる危機」とい

ような題で、一冊本を書いてあります。それはアメリカの国土保存運動というか、自然擁護運動の歴史を書いて、現状を論じたものであります。ニールドはケネディにひっぱられて内務長官になった人がありますが、この本の序文をケネディが書いてあります。これを讀むとアメリカの自然保護運動がどのぐらいい歴史を持っているかという事が、非常に良く解るのであります。政治学者として有名なジェファソンとか、哲学者として有名なエマソンとか、或いはソローとか、そういう人の名前がバタ／＼と出て来ます。つまり当時のそういう政治思想界の先覚者といつて良いでしょうが、そういう人達が熱心に自然保護の為に、又人間の生活というものを自然と結びつけなければ駄目だといつて事を言う為に永い間戦つてきた歴史がこの本の中に書いてあります。

これを見て私はアメリカでは、今でもこういう運動が盛んであつて、機械の破壊といつてもいいので、アメリカの人達が一生懸命で悪戦苦闘している事を識つたのです。そして国立公園がいくつか出来て、安心だといつてはならず、ほつておくとやはり工場がドンドン伸びていって、木を切つたり、野原をドンドン開拓してしまふ、アメリカの自然といつても枯渇しつつ有る事が解ります。そこで昨年頃アメリカの国会はワイルドネスといつて、それから野生地といつて、自然のままの土地を保護するための法律をついてあります。それによつて国土の或る地域のことだけはいさゝか手をつけずに自然のまま、文明を入れないといつて地域を限り、地図の上に線をひいて、そこを国で買上げ、一切を保護するといつて、この法律によつて政府が出来るといふ事なわけですが、なか／＼アメリカなんて物質主義の国のような事をいふけれども、やつてゐる事はどうしてこつちより、一枚も二枚も上なのです。そういうのをみて、非常に感心するのであり

ますが、アメリカでありますから、日本のように古いものは大してなく、街なんかでも一度はみんな壊してしまつて、新しい街が建つたのですが、それでも、例えばウィリアムスバーグというバージニアの一つの街全部をロツクフェラーが買つてしまつて、中の新しい建物を全部壊して、古い図面により同じモデルの家をずうと造り、十七世紀末の独立戦争後の街をそこにつくりなおしてしまつたのです。古くからある家も多少は残つていますが、大方はなくなつてしまつていて、エントツが出来たり工場が建つたりしたら、片端から全部追い出してしまつて、家を変更しないで、姿を変えないといつて事を条件にしています。勿論古い家に住んでいる人は自分の家に住んでいるのですから、裏の方に(バージニアという所は案外暑い所です)は冷房装置を入れるなどの事は良いのでしようが、エントツをどうするとか、窓をかえるとかいう事は許されないので。そういう風ですから今行つてみると一つの街が十七世紀末の姿にすつかりかえつてしまつていて、アメリカでイギリスの古い街みたくになつて保存されています。そしてそこに住む人は皆んな古い服装をしていて、仕事をしたり、葉を売つたりパンを売つたりしています。総督の官舎とか他のものも全部古い建物にもどしてしまつてそこには昔の服装をした女の人達がいろいろ世話をしています。人形かと思つて、ワケへ行つて手で触ろうとすると生きていたりして驚くのであります。そういう所があるのです。それに私は行つた事ではないのですが、デトロイトにはフォードがお金を出して、十九世紀末より、汽車が出来たり、電話が出来たりした当時の、丁度日本ていえば文明開化時代に相当するのですが、十九世紀後半の時代に相当する街を全部そこに造り出したそうです。これはまあ次のアメリカのエポックを象徴した一つの街なのではないか。そういうものを、とにかく金を出して、一生懸命に古い物

を無だけに大事にしているのです。英国に行けば、これは国の金ではないのです。親父が死ぬと遺産を半分寄付するとか、遺言で寄付するとかで集った、ナシヨナル、トラストという財団を持っていて、その財団が保護すべき自然とか土地とか森林とかを片端から買い上げてしまっていますが、イギリスの広さからいえば、随分無理な事もあるの

でしよう。日本と同じ位な大して広くもない所で、人間こそ日本より少ないでしようが土地の無い事では日本と違わないと思います。そういう事をドン／＼やって古い物を保護することを、かなり徹底的にやっています。そしてその財団は、森林保護とか小鳥を保護するとかを熱心にやっています。

つまり私は、機械が天下を風靡して、ブルドーザーで山をドン／＼くずすという事も、文明の一つの形だけれども、文明がもう一つ上の段階に進む時には、このブルドーザーをどこで止めるかという事を、我々必ず考える時があるに違いない。各国の事実がそれを証明していると思います。そういう意味で、黒四ダムとか謂わば文明第一期に属するものが我々今のうちから早く第二期の事を考える必要があると思います。

大町だけからいえば、山の一つの中心地だと思ふのですが、そういうものにふさわしいものを、どういう風に保存するか、或いは又どういう風にしてそういうものを作るかという事で今のうちにすべき事が有ると思ひます。何もかも大町／＼とやって押しつけるわけにもいかないでしようが、そうかとして、これは手の届かない事ですから、何はともあれ、この土地に於いて、そういう一つの運動という空気というものが出来るのが、非常に望ましいのではないか、これは大町だけの問題ではなく、日本の全体に通じる日本の国土擁護運動だと私は思うのであります。

いになって、山登りをしたという事が自分の生涯にとって、非常にありがたい事だったと

ノルウェー便り (その3)

「スキー博物館」を訪ねて

太田 昌 秀

スキー博物館は、私はかなり期待していたのですが、それ程深い内容のものではなく、至って観光用で競技スキーの解説が目立ちました。

オスロの街の中心から見ると、四方に氷河で削られたゆるやかな丘が、厚い針葉樹林に包まれて、三〇〇〜五〇〇mの高さに連なっています。そうした丘の一番高い所に数本のテレビ塔が並び、その丘の中腹にはスキーヤーなら誰でもきつと聞いたことのある、ホルメンコーレン Holmenkollen のジャンプ台が立っています。それは背の高い針葉樹よりもはるかに高く空に突立っていて、波止場からも

玉宮の庭からも、電車の窓からも、およそこの丘の見える所からは必ずこのジャンプ台が白い塔のようにはっきりと見えるのです。博物館のすぐ下のランディングゾーンにはレストランがあって、踏切台のすぐ下の平地にはそのレストランの野外テーブルが並び、観覧席の板の間には裸の男女がゴロゴロといた有様。更にランディングゾーンの下の湖では白い魚がたわわれているという初夏のホルメンコーレンでした。それはそれで目の保養になります。何といてもテツペンから眺めは千金の価値、ここでジャンプしたらフイヨルドの海へとび込むような気がする事でしょう。

数年前冬期オリンピックで八方尾根や、札

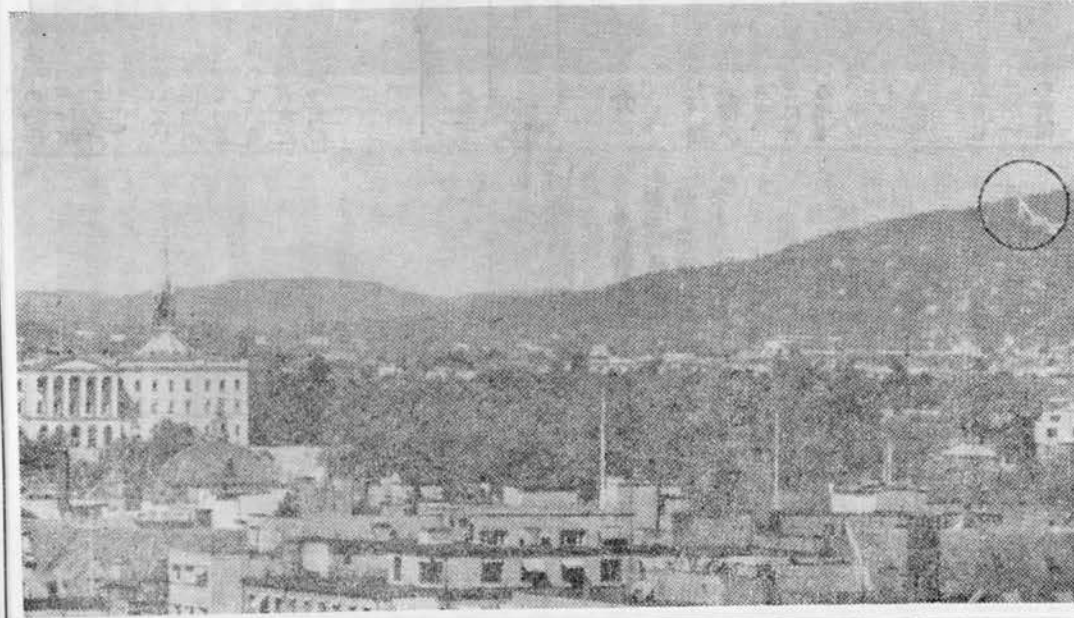
思うだけに、そういう点に特に関心を向けざるを得ないわけなのであります。

幌が立候補してさわいだこととがありましたが、この街の既存の設備と比べたら日本などは無に等しい状態。勿論決れば突貫でやるでしょうけれども、そういう速成品と一〇〇年以上の歴史の上に築かれたこの国の設備とはどうしても比べようがありません。

それにもっと大切なのは人の心。神風やミーハーのスキー、登山人口こそありませんが前にもおつたえしたように、スキーはこの国の人の生活に完全にしみこんでいて、その関心の深さは非常に身近かなものになっています。ところが、夏に入つたこの頃はいっせいに花が咲きほこり私のいる植物園などは本当に若葉と花の匂が風に乗ってきます。

チューリップやワスレナグサ、一番美しい素晴らしいのは街中の至るところにあるライラック、札幌なんかで問題になりません。

オスロ市街より見たホルメンコーレン、ジャンプ台



濃い紫から白までのさまざまの色合いで、甘い香りが公園という公園にあふれています。やっぱり北欧の春は一見に価するもの、この五月から六月は言葉で表現の外です。(次号につづく)

(北海道大学理学部在オスロ)

山の詩歌碑

福沢武一

左千夫歌碑

—東筑摩郡岡田村浅間桜ヶ丘—

松本駅前へ出ると初夏の暑さ。浅間ゆきバスに乗りこむ。女鳥羽川を渡る頃になると、前方までもに赤ざれの松山が見えだす。その尾根先が歌碑の所在地。のぞくようにするけれど、その影は目にとまらない。

終点を待たず下車。石ころ道をのぼりだす裏峽に農家が点在する。その中程から道をそれ、山腹の坂道にとりつく。今年初めてきく春蟬がおぼつかない鳴きようをして聞かす。尾根にでたところ、すぐそこに歌碑が立っている。ここは桜が丘とよばれ、温泉地からは五〇メートル程の高さ。風にふきたわんだ松の林に桜がまじっている。これは植樹されたもの。もとは純然たる松山だったことが想像される。幸い、物陰はたちまち動き去ってかげりのない碑面に接することができる。

前回よりずっと小さく見えるのはなぜか？…その後、大碑を見ることに、いつしか当左千夫歌碑をそれらになぞらえていたのかもれない。実測によると、—高さ、一六〇センチ。幅、中央で一二〇センチ。台座の高さ九五センチ。正面はときすまされ、雄巡に刻むところは、

秋風の浅間のやどり朝つゆにあめのと開く乗鞍の山 左千夫
裏正面に廻る。

伊藤左千夫先生明治四二年八月、当地来遊時之作ニシテ拈華塵蔵スル所ノ短冊ヲ拡大セルモノ也。刻シ以テ奉祝ノ意ヲ表ス 昭和一五年端午節温山誌

右側面には、
紀元二六〇〇年記念 浅間温泉有志者建之

これで建碑事情は明瞭。いささか添記するならば、—「左千夫歌集」に一首の詞書きが次のように示されている。

八月二日、予東都より馳せて松本に至る。会するもの堀内、胡桃沢、篠原、湯本久保田の諸氏。諸同人相見て只相悦ぶ。直情、言外にあり。共に相擁して薄暮浅間温泉に至る。独望月氏の病を以て、此行にもれたるを恨となす。家は小柳の湯といふ。楼上極めて遠望に富めり。

文中の人名はいずれもアララギ初期の信州歌人たち。左千夫その人についてはさきにふれた(一〇巻一号参照)。さて、色々の角度からカメラを向ける。落ちていた松の葉陰が消えて絶好の条件下だった。尾根続きの山際に浮いているのは白い夏雲。

終って背後を見廻す。右手の山隈に温泉街が横目に賑



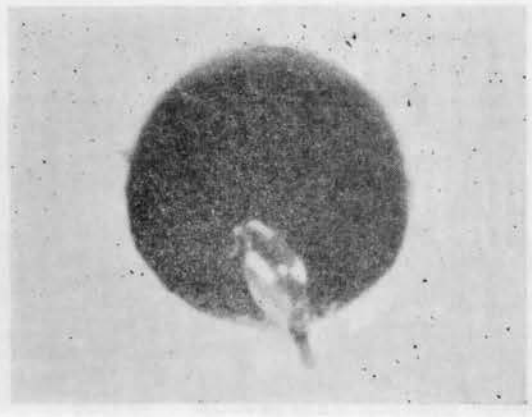
々しく見下され、真西は、—松本平の物影の向うに、北アルプスの山並が遠くのぞけている。左手、この尾根の真下に当るところ、県営球場が手にとるように見られる。

キビタキの育雛

長 沢 修 介

山岳博物館の園内は鳥の宝庫となった。建物の中にもあちこちからヒナの鳴き声や聞かれ、ムクドリを始めシジュウカラ、キビタキ、キセキレイが事務室や展示室、屋根などに営巣している。周囲が森林に囲まれているのでオオルリの美しい姿も窓越しに見られ、サンコウチヨウのホイ、ホイも聞かれ、クロツグミの陽気な囀りやカツコウの長閑な声も仕事をしながら聞くことができる。

シジュウカラの雛が屋根裏の巣から巣立ちしたと知らせが来て、あわてて駆けつけたが一日の差で見ることができず、キビタキの育雛を半日ゆっくり見ることにした。



◆博物館ニュース◆「雷鳥」の低地増殖をねらつて、六月二十二日から三日間、針ノ木岳と蓮華岳で八個を採卵、この卵は人工孵化され七月中旬ごろ雷鳥のヒナにかえる。

お願い「山と博物館」の購読者をつのつております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。

表紙説明

シラネアオイ(鹿島槍にて)
撮影 千葉 彬 司

山と博物館 第10巻第6号
一九六五年六月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)二一
大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町
大糸タイムス印刷部